

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 Q

今回のテーマ

躁的心性で起こした行動（ニアサードインパクト）後のシンジの苦悩について考えていく

はじめに

新劇場版 破の最後はシンジの綾波の一途な愛を示す非常に感動的なシーンだが、このシーンはこれまでの従来のロボットアニメで何度も提示されているものであり、前回、「破」を取り扱った時に妄想分裂ポジションにおける懐古的側面があるのではと伝えてきたと思う。これは悪い対象によって奪われた良い対象を取り返すという万能空想であり、妄想分裂ポジションの心性にとどまっている心性であると考えられる。

シンジの心の観点から考えたときに、シンジ自身は、思春期の喪失を受け止めきれないでいるように感じられる。綾波との関わりの中で一度は現実を受け入れ始めたが、「破」において、アスカが使徒になってしまったこと、そして第 10 使徒に綾波が飲み込まれてしまうという、相次ぐ耐え難い喪失にシンジの心が受け止めきれなくなってしまったものと考えられる。そこでシンジは再び妄想分裂ポジションの世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、最終的に綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になって（躁的防衛）「破」は終わったと思う。（その世界がこのアニメのテーマでもある人類補完化計画のようにも感じられてしま

う。)

躁的な世界では新しく理想化された輝く対象が熱望される。その対象に向けたさまざまな欲望や刺激的な考えが休みなく心に衝迫し、その対象との一体感体験へと絶えず駆り立てられる。一方でその妨げとなるあらゆるものには、容赦のない攻撃や破壊、非難が向けられる。

躁的な世界は幻想であり、維持できるものではない。排出された悲哀がふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わる。しかし新劇場版 Q では、その後、シンジの躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる。シンジがこれまで排出してきた悲哀が再び回帰し、苦悩し、もがき、行動する様が描かれているように感じられる。

そこでのシンジの心の揺れ動きについて考えていきたいが、それは翻って今の若者がノリでやったバイトテロや客テロの行動後の周囲からの容赦のない攻撃や非難にも通じるよう感じられる。

1. 思春期における青年期に至る過程 (Adolescence Process) について

心身が成長し、大人のような体つきになり、二次性徴とともに色々な欲望が出てくる。これまでの学童期に自身が調和が保たれていると感じ、慣れ親しんできた価値観がひっくり返され、社会的、家庭的秩序がある意味崩壊していくような感覚を抱き、色々なことに幻滅し、自身のこれまでの生き方（大人達の言うことに従う良い子）が何だったのかと突きつけられる思いに囚われ

る。

そして彼らの多くが出来る限り避けようと努める内的葛藤や不安が刺激される。しかしこの体験を、回避しようとし、考えないようにし、色々と刹那的に行動することで、なかったことのようにする。この心の動きを 思考を回避する心の動き（Anti-thinking process）という。それは抑うつポジションを受け入れられない、彼らの妄想分裂ポジションの心性に基づく行動と考えられる。

思考を回避する心の動き（Anti-thinking process）とは？

- ①混沌の回避しようとして万能感を抱く（カリスマ、理想化）
- ②個人でいるよりグループで（SNS 依存、オンラインゲーム依存）
- ③知性化（知性の回避）
- ④考える事より行動（暴力・リストカット等）
- ⑤心をもつことの拒否（ひきこもり、不登校）
- ⑥感情かき乱されるよりも身体的病気になること（身体化）
- ⑦限界ある現実よりも万能的空想的世界

（good and bad な世界 白黒はっきりさせる 極端な価値観）

→新劇場版 破の最後から Q のシンジの行動はまさに、⑦の心の動きから起こしているように感じられる。

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

シンジは14年ぶりに目覚めたが、全身拘束され、担当医務官の鈴原サクラはまるで未確認生物のような対応をして、拘束が解かれた後も、DSS チョーカーがつけられ、シンジを見た周囲の人々は憎しみとも怯えとも怒りともつかない表情をして、シンジを見てみぬふりをして、関わろうとしない。彼らはニアサードインパクトで彼ら自身が受けた心の痛みを消化できず、そしてニアサードインパクトを起こしたシンジに怯え、彼の存在を受け止められないでいるように感じられる。

それ故、ネーメズィスシリーズが襲来してきたときも、

シンジ：僕は乗らなくていいんですか？ミサトさん！

リツコ：そうよ。あなたがエヴァに乗る必要はありません

ミサト：碇シンジ君。あなたはもう何もしないで

シンジはいわば「みそっかす」のように、無価値な存在として扱われる。

どうしてそう状況に至ったのかは、後にリツコから説明を受ける。

リツコ：先に突如12秒間も覚醒状態と化した事実は看過できない。故にあなたには、DSS チョーカーを装着させてあります。

シンジ：なんですかこれ……？

リツコ：私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です

シンジ：どういうことですか……？

リツコ：エヴァ搭乗時、自己の感情に飲み込まれ、覚醒リスクを抑えられない事態に達した場合、あなたの一命をもってせき止めるという事です。

→シンジを取り巻く人々が皆、殺気だっており、殺伐とした重苦しい雰囲気になっている。

1) シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面

アスカ「あれから 14 年経ってるってことよ。バカシンジ」

シンジ「アスカ！良かった！やっぱり無事だったんだね！アスカ……」

アスカは無言のまま、シンジに殴り掛かろうとする。

アスカの拳がシンジの顔の目の前で止まる。シンジとアスカの間は強化ガラスで仕切られ、そのガラスに亀裂が走る。

アスカ「駄目ね……抑えきれない。ずっと我慢してたし……」

シンジ「……なんなんだよ……」

アスカ「怒りと悲しみの累積……」

シンジ「何のことだよ……あれ、アスカ、左目……」

アスカ「あんたには関係ない」

シンジ「アスカ……さっき 14 年って……でも、眼帯以外変わってない……」

アスカ「そう。エヴァの呪縛」

シンジ「呪縛……？ちょっと待ってよ！アスカなら知ってるだろ！ねえ、綾波はどこなんだよ！」

シンジは立ち上がってアスカを呼び止める。

アスカ「知らない」

シンジ「知らないって……助けたんだよ。あの時！」

アスカ「人ひとりに大げさね。もうそんなことに反応してる暇なんてないのよ、この世界には。そ

うでしょ？葛城大佐」

アスカはそう言うと、ドアの向こうへ姿を消してしまう。

シンジ「アスカっ！」

【考察】

シンジの躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる」と述べたが、その思いをシンジに対して一番強く表出したのはアスカであったと考えられる。そしてアスカが語っていたように、怒りや悲しみ思いをシンジにぶつけたのだと思う。しかしシンジに対して憎しみの一辺倒だけの感情を抱いているようには感じられない。

何かアスカ自身が自身に抱いてきた感情（自分が何もできず、使徒に乗っ取られてしまった怒り

や悲しみなのかもしれない。そしてその贖罪のためにアスカは WILLE で活動しているようにも感じられる。) をシンジに投影し、シンジにぶつけている (投影同一化) 心性もあるように感じられる。ある種、それはアスカのシンジへの甘えでもあり、久しぶりの再会を素直に喜べない、それはアスカ自身の心の不器用さであり、周囲の雰囲気ゆえに表出できない思いでもあったように感じられる。そしておそらく葛城ミサト自身も同じように感じていたように思われる。

シンジの心性という視点 (シンジの内的世界を外界に投影していると捉えた視点) からこの場面をみたとき、アスカや葛城ミサトのそのようなアンビヴァレントな思いは感じられず、14 年前の時に交流していたとき違って、皆、迫害的な対象になってしまったと感じ、一時は成熟しかけたシンジの心性が妄想分裂ポジションへと逆戻りし、また自己愛的な殻の中に閉じこもろうとしているように感じられる。

アスカがシンジを殴りかかったときにヒビが入った強化ガラスがなにかシンジの自己愛的な殻の象徴 (ヒビが入ってもなかなか破れない強固な殻) のようにも感じられる。

そして、この Q の物語において、冒頭部からここまでのシンジの取り巻く世界をシンジ自身の内的世界と捉えたとき、シンジは周囲に対して迫害的に捉え、綾波という良い対象とのつながりを強固にさせながら自己愛的な殻に閉じこもり続けていることを表しているように感じられる (cf: 秒速 5 センチメートル参照)。そして自身の心の成熟がおきないまま、周囲の変化に取り残され、シンジ自身が現実を受け入れられないというように描かれているようにも感じられる。

→周囲に対してシンジは迫害的に抱いているが故に、綾波の導きに従うように、今いる WILLE の場から出ていき、父のいる NERV に向かったと考えられる。

それは、まさに序で第五使徒を倒した後のシンジとミサトのやりとりで、葛城ミサトに対して迫害的対象と抱き、第3新東京市から出て行こうとしたシーンと重なる（反復強迫）。

ある意味、シンジは周囲に対して迫害的に感じ、以前の心性に退行しているようにも感じられる。

綾波が操縦する0号機にシンジが乗り込み、飛び立った後にアスカが言った言葉が非常に印象的である。

アスカ「ふん、あれじゃあ、バカじゃなく……ガキね」

→破で「バカ」とアスカが言うのは同ジエディプス葛藤にいる嬉しさと照れ隠しだと伝えたが、シンジの心性はそこにおらず（バカじゃなく）、退行している（ガキね）と言っているように感じられる。

3. NERV に戻ったシンジはどうなったのか？

1) NERV でのシンジの生活はどんなことを象徴しているのか？

綾波の誘いから NERV 本部に戻ったシンジだが、「ジオフロントなのに、空が見える……」状態でボロボロで朽ちた NERV の状態に「ホントに14年も経ってるんだ……」と感慨深くなる。（こ

の世界そのものが彼の心性の象徴 cf：序の綾波の部屋)

そしてしばらく何もない、だだっ広い、シンジ側からはかけられない電話が置いてある殺風景な部屋で、シンジは味気ないペースト状の食べ物（離乳食を彷彿とさせる：口唇期→肛門期か？）を日々の食事をしている。

→以前の序の冒頭部の頃のように、受け身的で感情のないシンジに戻ってしまったこと象徴しているように感じられる。

しかし

シンジ「やっぱり、お礼言っておかなきゃ」

→この状況を変えた思いもシンジ自身には残っている。

2) 綾波との関わりでシンジはどのように感じたのか？

シンジ「綾波？ やっと見つけた！」

シンジは綾波の部屋に入るが、殺風景で屋根もなく部屋の程をなしていない。

シンジ「綾波！ ずいぶん探したよ……」

シンジ「おっ、ああっ！ ちょ……服、なっ、なんか服着てよ！」

綾波「命令、ならそうする」

シンジ「は、入るよ……」

シンジ「あの……綾波、これ、ありがとう。……ずっとお礼言いたかったんだ」

シンジは、音楽プレイヤーを綾波に見せた。しかし、綾波は無表情のまま。

シンジ「プラグスーツ、新しくなったんだ。似合うけど、黒だとちょっと……」

綾波「……」

シンジ「なんだか、ずいぶん変わっちゃったんだね。ネルフ本部……」

シンジ「なんでミサトさんは使徒じゃなくてネルフと戦ってるんだ……」

綾波は変わらず、無表情でシンジを見てるだけ。

シンジ「父さんはここで何する気なんだ」

シンジ「みんなどうしちゃったんだろう……ねえ綾波は何か知らないの？」とシ綾波「……知らない」

シンジ「そっか……うん。そうかもな。……ねえ、綾波はいつ初号機から戻ったの？」

綾波は無言のまま答えない。

シンジ「ここは部屋にもなってないよ……。綾波らしいと言えばそうだけど、学校とかなさそうだし、いつもどうしてるの？」

綾波「命令を、待ってる」

シンジ「……ここ、本もないんだ。本とか読んでないの？」とシンジは訪ねた。

綾波「本……『綾波レイ』なら、そうするの？」

シンジ「うん……よく読んでたじゃないか。部屋にもあったし」

綾波「そう……」

シンジ「そうだ、本、ここの図書室で探して持ってくるよ！あの、英語の本がいいかな。いつも持
ってて、好きみたいだし」

綾波「好き？」

シンジ「うん……だと思っけど……」

少し不安な表情を見せるシンジ。

綾波「好きって、何……？」

【考察】

このシーンと序でシンジが初めて綾波の部屋に行って、綾波に遭遇し、その後二人の交流が深まっていくシーンと対比してみると興味深い。序と同じようにシンジは、当初、積極的に綾波に声をかけていき、シンジ自身が周囲に対して抱いている思いをぶつける。しかし以前のように綾波はシンジの思いを受け止め、返答する感じはない。何も状況をわかっておらず、記憶もない感じの綾波の応答に、シンジは次第に綾波を気にかけるような発言へと変わっている。

これはシンジにとって綾波という存在が、以前のように自分の思いを受け止めてくれる存在ではなくなってしまったのではないか（シンジ自身が抱いてきた良い対象ではなくなってきている）？という喪失と不安な思いから出ているように感じられる。

「ダメだ。動かないや……」

音楽プレイヤー色々動かそうとしても、壊れて動かなくなっている。

→移行対象としての機能を果たさなくなっている象徴。

そしてシンジは横になると今まで言われたこと何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

支えのなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと思っていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も移行対象にならなくなっていると感じているシンジは、支えを失い、孤独を感じていたと感じられる。そのなか、渚が彼をピアノの連弾に誘い出す。

1) 渚カヲルはどんな人物なのか？

「君（シンジ）と同じ運命を仕組まれた子ども」と自己紹介する。

常に柔和な笑みをたたえ、感情を出すことはほとんどなく、ミステリアスで達観している感じさえする。その点が綾波レイと似ているようにも感じられる。

そのカヲルがシンジにピアノの連弾を誘う。全くピアノを弾いたこともないシンジは戸惑うが、それにカヲルはコメントする。

カヲル「ピアノの連弾も音階の会話さ。やってみなよ」

シンジ「いいよ。僕には無理だよ」

カヲル「生きていくためには、新しいことを始める変化も大切だ」

その後カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

シンジ「音が楽しい。二人ってすごいね」

この会話のやり取りから、カヲルは殻に閉じこもろうとするシンジに殻を破り、外界で人と深く情緒的に関わること（それがアンサンブルだと考える）が非常にイキイキとした彩りを持つものな

のだということを水先案内人のようにさし示しているように感じられる。

→設定ではシンジの理想化された対象とも言われており、シンジ自身が抱いてきた内的な（理想的な）父の象徴のようになっている。

2) 渚カヲルと関わることで、シンジの心はどのように変わっていったのか？

シンジはカヲルと関わることで彼とピアノの連弾を通じて、深く情緒的に関わっていく。

綾波の部屋に向かったが、綾波がおらず、シンジが置いていった本も手付かずのままで、シンジはそこに新しい本を重ねておいた後のシンジとカヲルの2回目の連弾のシーン

カヲル「おはよう。碇シンジ君。今日ははやいね」

シンジ「他にすることがないから……」

そして、二人はピアノの前に腰を下ろして連弾を始める。

カヲルの奏でる旋律に、シンジがしっかりと付いて行く。

シンジ「どうしたらもっとうまく弾けるのかな」

カヲル「うまく弾く必要はないよ。ただ気持ちのいい音を出せばいい」

シンジ「じゃあ、もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」

カヲル「反復練習さ。同じことを何度も繰り返す。自分がいいなって感じられるまでね。それしかない」

【考察】

シンジが「うまく弾く」コツを尋ねたときにカヲルは「気持ちのいい音をだせばいい」と言っている。そこでは、なにか周囲に対してうまく振る舞う必要はないと言っており、そのことに加えて、自分が心地の良いと感じられることに目を向けていくことの大切さを伝えている。

これは序においてシンジ自身は傷つかないように自己愛的殻を作って、非常に物分かりの良い子人のように接してきたと考えられるが、Q ではまた序における初めのシンジに戻りつつあるように感じられる。その中でカヲルは人と交流することの中で大切なことは、そのように外面を磨いていくことは必要ないこと、自分が心地よいと感じることを追求していけばいいと伝えているように感じられる。

しかしそれは自身の欲望に身を委ねることではない。シンジは「もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」と尋ねている。それは社会の中で自身が心地よくイキイキと感じながら他者と関わっていくことはどうすればいいとカヲルに質問している。それに対してカヲルは「反復練習」の重要性を説いている。楽器の演奏でもスポーツでも反復練習と非常に重要（cf. 1万時間の法則）だが、自分のこれだと思えるものをとことん追求していく、ひいてはそのことが自身に磨きがかかることにも繋がっていると言っているように感じられる。

この会話のやり取りが連弾の中で交わされていることが大切。連弾に関わることを喜びと一緒に考

えながら、より深い喜びを得られるには何が大切か？ということを伝えている。

その後のシーン

シンジが、部屋でピアノをイメージしながら練習している時に、ふと音楽プレイヤーを見て、後日カヲルにそれを渡す。

カヲル「いいよ。まかせて。動くようにすればいいんだね」

シンジ「うん、ありがとう。なんだか悪いかな。こんなことまで頼んじゃって」カヲル「気にすることはないよ。友達だからね」

空は高い位置に夕日に照らされて雲が流れていた。

カヲル「暗くなってきたね。今日はこれで戻ろう」

シンジ「ねえ、もう少しここにいない？このまま星を見ようよ」

カヲル「星を？星が好きなのかい？」

シンジ「うん……この宇宙の大きさを感じていると、小さい時からなんだかすごく安らぐっていうか……14年くらいじゃ何にも変わらないのがうれしいって言うか……自分の事なんてどうでもいい気がして、落ち着くっていうか……うまく言えないよ」

カヲル「君の気持は伝わるよ。変化を求めず、虚無と無慈悲な深淵の世界を好む、君らしいよ。い

いね。二人で横たわるって。こんなに心地良いとは知らなかったよ。ありがとう。誘ってくれて」

シンジ「いや、そんな別に……渚君と星を見たら、楽しいかなって、ちょっと思っただけ……」

カヲル「楽しいよ……僕は君と会うために生まれてきたんだね」

【考察】

音楽プレイヤーはシンジの移行対象である。動かなくなったプレイヤーをカヲル手渡すのは象徴的である。これまで綾波がシンジにとって現実世界に関わろうとするための対象であったが、Qでは、今までの綾波ではなくなってしまい、移行対象としての機能を果たせなくなった。その対象がカヲルに変わりつつあるということを描いていると考えられる。

そしてシンジはカヲルと一緒に夜空に輝く星を見る。シンジの言葉にカヲルが「変化を求めず、虚無と無慈悲な深淵の世界を好む、君らしい」と応答する。それはまさにシンジ自身が自己愛的殻の中で感じてきた心性そのものなのだが、その思いを汲み取り、そのシンジの世界に触れようとするカヲルの姿が見受けられる。それはシンジにとって非常に心地よい体験であったのではないかと。そして最後のカヲルの言葉はシンジの思いを代弁しているように感じられる。

そしてカヲルと思いを共有していく中で、シンジは自身が感じている感情に向き合い、いまが、どういう状況になっているのか知ろう考えるようになったのではないかと。

3) シンジが現実を知ること。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、鈴原トウジ書かれたタグのついたシャツを着て、シンジは自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたと考えられる。

シンジ「うわっ！」

断崖絶壁の階段は、一步踏み間違えれば命の保証はないほどの高さにある。下から吹き上げる強風と濃い霧が、足下の悪さに追い打ちを掛ける。シンジは壁伝いの鎖にしがみついて下りようとするが、思うように前へ進めない。辺りは有害な空気が充満しているため、シンジは防護服に体を包んでいる。いつもよりかさばる恰好が、更に歩き辛さを増している。一方、カヲルはいつも通りの制服姿のまま、まるで恐怖感のない様子で階段を降りて行った。カヲルの姿は、みるみるうちにシンジとの距離は開いていき、霧でかすれて薄く、小さくなっていった。

シンジ「渚君！渚君！！」

カヲル「さあ、もう少しだ」

カヲル「もうすぐ雲が切れる。君の見たい真実が見えるよ」

間もなく、厚い雲に覆われた空がゆっくりと幕を開けた。

シンジ「……なんだこれ……」

想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。その十字架は雲を突き抜けるほど高い。雲の絨毯の遥か彼方には、血で染まった星が浮かんでいる。その星は視界の半分を覆うほどに近い。

カヲル「君が初号機と同化している間に起こったサードインパクトの結果だよ」

シンジ「これじゃあ、街のみんなは」

カヲル「この星での大量絶滅は珍しいことじゃない。むしろ進化を促す面もある。生命とは本来、世界に合わせて自らを変えていく存在だからね。しかし、リリンは自らではなく、世界の方を変えていく。だから、自らを人工的に進化させるための儀式を起こした。古の生命体を贄とし、生命の実を与えた新たな生命体を作り出すためにね。全てが太古よりプログラムされていた絶滅行動だ。

ネルフでは人類補完計画と呼んでいたよ」

シンジ「ネルフが、これを……父さんは何をやっているんだ」

カヲル「碇シンジ君。一度覚醒し、ガフの扉を開いたエヴァ初号機は、サードインパクトのトリガーとなってしまった。リリンの言うニアサードインパクト。全てのきっかけは君なんだよ」

シンジ「……違う……僕はただ、綾波を助けたかっただけだ……」

カヲル「そうだね。しかしそれが原因で……」

シンジ「そんな……僕は知らないよ！そんなこと急に言われたってどうしようもないよ！！」

カヲル「そう。どうしようもない君の過去。君が知りたかった真実だ。結果として、リリンは君に罪の代償を与えた。それが、その首のものじゃないのかい？」

シンジ「罪だなんて……何もしてないよ！僕は関係ないよ！！」

シンジは頭を抱えて苦悩する

カヲル「君になくても他人からはあるのさ。ただ、償えない罪はない。希望は残っているよ。どんな時にもね」

【考察】

カヲルとの交流の中で自己愛的な殻を破り、現実に向き合おうとし、カヲルに懇願し、街の様子を見に行ったが、そこに広がる想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。そして破壊され尽くした光景にシンジは言葉を失ってしまう。そして自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの心性のシンジは自分の問題とは捉えず、父がこの様にしたと考える。

そこにカヲルは静かにシンジ自身がこのニアサードインパクトを引き起こしたことを伝え、シンジは非常に混乱する。シンジにとってこの惨状は取り返しのつかぬ程に破壊されつくされており、自身がこんなことをしてしまったという現実を受け入れることは耐え難いものであると考えられる。それであるが故にシンジはカヲルの伝える真実を必死に「僕は関係ないよ！！」と言い否認し続ける。

現実を受け入れるということは、これまで外部に投影していた攻撃性や破壊性が自分自身が行なってしまったのだと気づき、自分に責任があるのだと認め、受け入れる心の作業であり、まさにそれが抑うつポジションの心性である。しかしあまりの惨状にシンジは自分がしたことを受け止めきれず、抑うつポジションに移行しようとしていた心性が再び妄想分裂ポジションの心性に移行し、全てを否認し、自己愛的殻に再び閉じこもうとしている。

ここでカヲルが最後にいう「償えない罪はない。希望は残っているよ。」という言葉は非常に重く響く。そしてこの言葉はカヲルが「破」の最後に言った「今度こそ君だけは、幸せにしてみせるよ」と言う言葉に呼応している様にも感じられる。

幸せを日々のありふれた生活をイキイキと彩りを感じさせることととらえるならば、シンジを幸

せにさせると言うことはシンジが形成している自己愛的殻を破らせ、妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行させることであると考えられる。シンジにそう仕向けていこうとカヲルは考えていたのではないだろうか？

→その後冬月からシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられ、シンジはどん底まで突き落とされ、シンジの脳裏にはこれまで直接父やミサトそして周囲の人々に言われてきた迫害的な言葉がリフレインし、苦しみもがく。

「何してたんだ僕は……」

部屋の中で音楽を聴いていたシンジは、自分の無力さに耐えきれず音楽プレイヤーを放り投げ、

「うわあああ！！」と大声をあげてしまう。

あまりの迫害感にシンジは取り乱してしまうが、自分ではどうしようもできず、自分をまもってくれる音楽プレイヤーも自分の心を守るには機能せず、苦しみながら孤独に必死に耐えていた。

4) 現実を受け入れられず苦悩するシンジにカヲルはどの様に関わっていったのか？

現実を受け入れられずに苦悩し続けるシンジ。そこにカヲルが現れ、シンジと一緒にエヴァに乗ることを提案する

シンジ「いやだ！エヴァなんかもう乗りたくない！綾波を助けてなかったんだ！」

シンジは部屋の壁に頭を打ち付けた。

シンジ「エヴァに乗ったっていいことなんかなかったんだ！もういやだ！何もしたくない！！」

カヲル「そうして、つらい感情の記憶ばかりをリフレインさせてもいいことは何も生まれない」

カヲルは床に転がっていた音楽プレイヤーを取り上げる。

シンジ「いいことなんかないよ……渚君が見せたんじゃないか……あの真っ赤な、どうしようもない世界」

カヲル「エヴァで変わったことはエヴァで再び変えてしまえばいい」 シンジは壁に頭をもたげたまま、絞り出すような声で苦悩する。

シンジ「そんなこと言ったって、エヴァも父さんもミサトさんも、何もかも信じられないよ！」

カヲル「でも、僕は信じてほしい」

シンジ「できないよっ……ミサトさんたちが僕にこれを付けたんだ……もうエヴァには乗るなって。乗ったら死ぬって脅されて……」

シンジ「もう……エヴァなんかどうでもいいんだ……」

無言のまま、カヲルの手がそっとシンジの首に掛かる。シンジは驚いて言葉を失ってしまう。カヲルはシンジの首に巻かれていたチョーカーのロックを外して、それを自分の首へと移し替えてしまう。

カヲル「分かっている。リリンの呪いとエヴァの覚醒リスクは僕が引き受けるよ」

シンジ「渚君……」

カヲル「気にしなくていいよ。元々は僕を恐れたリリンが作ったものだからね。いずれはこうするつもりだったんだ」

その声は、シンジの動揺を和らげるものだった。

カヲル「碇シンジ君。君の希望はドグマの爆心地に残る二本の槍だけだ」

音楽プレイヤーを挟んで、カヲルはシンジの隣へ腰を下ろして語る。

カヲル「それが補完計画発動のキーとなっている。僕らでその槍を手に入ればいい。そうすればネルフもフォースインパクトを起こせなくなるし、第13号機とセットで使えば、世界の修復も可能だ」

シンジ「そうだね……うん、君になら出来るよ」

カヲル「君となら、だよ。エヴァ第13号機はダブルエントリーシステムなんだ。二人でリリンの希望となろう。今の君に必要なことは何よりも希望。そして贖罪と心の余裕だからね」

(中略)

カヲル「ピアノと同じだ。二人一緒ならいいことがあるよ。シンジ君」

シンジ「行こう。カヲル君」

【考察】

自分の起こしたニアサードインパクトのあまりの惨状、そのことに加え、冬月によって伝えられた綾波への真実から、より周囲に対して迫害感を感じ、カヲルとの関わりで心を開きつつあったシンジは再び自己愛的殻のなかに閉じこもってしまう。そこにカヲルが現れる。そして彼と一緒にエ

ヴァに乗ることを提案したが、彼が「希望は残っているよ。」と言った様に、一緒に現実をみていこうと言う提案だったと考えられる。

一方でロンギヌスの槍はキリストの受難に関わる聖遺物であり、崇敬の対象である。その槍を抜くと言うことは奇跡を生み出すきっかけを作ろうと言っている様に感じられる。それが人類補完化計画を勧めていくことに必要不可欠なのだろうが、一方で、シンジの自己愛的殻を破り、他責的で迫害的な妄想分裂ポジションの心性から自責的で贖罪を伴う抑うつポジションへの移行をスムーズに行わせようとする彼のシンジへの優しさの様にも感じられる。

カヲルが最後に「今の君に必要なことは何よりも希望。そして贖罪と心の余裕だからね」と言ったのは抑うつポジションの心性を端的にしめしている様に感じられる。

これまで散々迫害的な扱いを受けてきたシンジは当然のことながら、エヴァに乗ること（＝現実をみること）を拒絶する。そしてカヲルは拒絶するシンジの首についている DDS チョーカーを外す。これはある意味シンジが抱いてきた強烈な超自我であり、カヲルがそれを外し、自分の首に付け替えたということは、もっと自由に生きていんだよ、これまでの超自我に伴う苦悩は引き受けるよ、というメッセージをシンジに送っているように感じられる。そもそも超自我はある意味、人が社会生活を形成し、維持する上で作り出された心的装置である。その中でシンジはカヲルに心を開き、エヴァに乗ることを決意したものと考えられる。

そのあとカヲルとシンジがエヴァンゲリオン第 13 号機に乗った後の会話が特徴的である。

シンジ「僕らだけじゃないんだ……」

カヲル「マークナインの事かい？ 援護のためだよ。ヴィレの動きを警戒しているのさ」

シンジ「そんなの、僕らだけで十分だよ」——『綾波じゃないのに』

綾波「綾波じゃ、ない？」

【考察】

なにかシンジはカヲルを良い対象と捉え、その結びつきが強くなり他者（ここでは初期ロットの綾波）を排除しようとする心性になっている。それは妄想分裂ポジションの心性であり、今後の展開がカヲルの意図（償い、心の余裕を経て、希望を抱く抑うつポジションへの移行）とは異なった形になることを示唆しているように感じられる。

5) 槍を抜くことに躊躇してしまうカヲルにシンジはどの様に感じたのか

シンジと一緒にエヴァ 13 号機に乗ったカヲルだが、リリスの軀に刺さっている槍の形状が変化していることに気がつき、作戦実行を躊躇う。

そこでのシーン

カヲル「ちょっと待って、変だ」

カヲルは顎に手を当てて何かを考えている。

シンジ「どうしたのカヲル君？」

カヲル「おかしい、二本とも形状が変化して揃っている」

しかし、シンジは先を急ごうとする。

シンジ「早く槍を抜こうよ。そのためにエヴァに乗ってきたんだから……」

突然、背後で爆発が起きる。爆発で生じた衝撃で 13 号機がよろめく。

シンジ「うわっ！」

シンジ「なんだよこれ！？」

襲来してきた機体は赤く、シンジは意外な相手の襲来に気付く。

シンジ「改 2 号機！アスカ！？」

改 2 号機は度重なる攻撃をエヴァ 13 号機に対して行い、どうにか AT フィールドで弾き返す。

シンジ「何すんだよ！アスカ！」

アスカ「バカシンジ！あんたまさかエヴァに乗ってんの！？」

シンジ「そうだよ、エヴァに乗って、世界を変えるんだ！」

アスカ「ガキが……だったら乗るな！！」

(省略)

シンジ「なんで邪魔するんだアスカ！あれは僕たちの希望の槍なんだよ！？」

アスカ「あんたこそ！余計なこと！するんじゃないわよ！ガキシンジ！またサードインパクトを起

こすつもり！？」

シンジ「違う！槍があれば、全部やり直せる。世界が救えるんだ！」

アスカ「……ホントにガキね。…分からず屋！」

(省略)

カヲル「やめようシンジ君。嫌な予感がする」

シンジ「駄目だよカヲル君！何のためにここまで来たんだよ！」

カヲル「もういいんだ。あれは僕らの槍じゃない」

シンジ「僕らの槍じゃないって……槍が必要だって君が言ったんだ。だから僕は、エヴァに乗ったんだよ！」

13 号機は、リリスの大きな体によじ上って槍に近づいていた。シンジは、カヲルの言うことを聞かず、カヲルと繋がっていた機能を断ち切り、独断で目的を果たそうとする。

シンジ「操作系が！」

エヴァの目の光が赤色に変わった。

シンジ「カヲル君のために、みんなのために槍を手に入れる。そうすれば世界は戻る！そうすればミサトさんだって！」

(略)

カヲル「駄目だシンジ君……！」

カヲルは蒼白した顔面でシンジを見た。

アスカ「やめろ！バカガキ！！」

シンジ「うああああああああ！！！」

シンジはリリスの体に突き刺さった大きな槍を引き抜くと、それを頭上にかざして交差させる。シ

ンジは目的をやり遂げたことで、達成感のある表情を見せた。

【考察】

愛する対象を失う不安が強まれば強まるほど自我はますます対象を救おうと切望し、修復のタスクが困難であればあるほど、超自我に関連した要求がますます厳格さを帯びる（メラニー・クライン）

→自身で犯した罪や苦悩を受け入れられず、カヲルやアスカの制止を全く聞き入れず、槍を抜いてしまう。それは自身の贖罪の念に耐えきれず、シンジは妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行ができなくなってしまう。そのために妄想分裂ポジションを強化させ、ふたたび周囲を迫害的に捉え、自己愛的殻に閉じこもり、自分しか信じられなくなってしまう。そしてシンジは槍を抜くこと（奇跡を起こそうとすること）ばかりに固執してしまい、それが世界を救う唯一の方法だと信じ込んでしまう。それは万能的な存在（万能空想）になることで、苦しみから逃れようとする心性（躁的防衛）の様に感じられる。これは「破」最後の綾波を助け出すシーンで見られたような、

喪失に伴う抑うつ的感情を自身で受け止めきれず、犯してしまった過ちとなんら変わらず、反復強迫の様にも感じられる。

つまり、シンジはこの時点では、カヲルが提示した「今、大切なこと、何よりも希望。そして贖罪と心の余裕」という思いを歪んだ形で受け止めてしまったのではないだろうか。そして二本の槍の形状の変化（歪み）というものが、そのシンジの認識の歪みの象徴である様にも感じられる。

6) 槍を抜き、思い描いていたものと異なり、排出されてきた悲哀がふたたび心に回帰して抑うつ
の苦しみとして体験されるまで

槍を抜くことでシンジは世界が救えると思い込んでしまう。そのことに加え、周囲を迫害的に捉え、誰の制止も受け入れず、槍を抜くことに固執し、それを遂行してしまう。ある種未熟な行動であり、アスカが何度も「バカガキ」と言いたくなる気持ちも解らなくはない。しかし槍を抜き、フォースインパクトが起ころうとしている状況を目の当たりにしてシンジは自分のしたことに直面しする。

シンジ「なんだこれ……」

天高く舞い上がったエヴァの頭上から光の輪が広がり、空一面を赤い波紋で包み込んで行った。

シンジ「なんなんだよこれ……」

朽ち果てた地上の街並の崩壊。至る所に断末魔のような人々の叫び声が聞こえる。地表の下から

姿を現した巨大な物体が、街全体を押し上げている。

シンジ「僕のせいなのか……僕が槍を抜いたから……。これって……」

カヲル「フォースインパクト……。その始まりの儀式さ。」

(略)

シンジ「僕のせいなのか……僕が、僕が……」

カヲル「君のせいじゃない」

シンジ「えっ」

カヲル「僕が第 13 の使途になってしまったからね。僕がトリガーだ」

シンジ「どうしよう……ねえ、どうしよう……。カヲル君、僕は……どうしたらいいの？」

カヲル「魂が消えても、願いと呪いはこの世界に残る。意志は情報として世界を伝い、変えていく。

いつか自分自身の事も書き換えていくんだ。…ごめん。これは君の望む幸せではなかった。ガフの

扉は僕が閉じる。シンジ君が心配することはない。」

13 号機は、二本のロンギヌスの槍を掲げながらゆっくりと天に昇って行く。

シンジ「カヲル君……カヲル君が何を言っているのか、分からないよ！」

13 号機は片方のロンギヌスの槍を振りかざし、自らの胸に突き刺す。強烈な痛みがシンジにも伝わる。

シンジ「うわっ…！」

カヲル「シンジ君は安らぎと自分の場所を見つければいい。縁が君を導くだろう」

続いて、もう片方の腕を振りかざし、13号機は二本目の槍も自身の胸に突き刺す。

カヲル「そんな顔をしないで。また会えるよ、シンジ君」

シンジ「カヲル君！」

カヲルの首に巻いてあったチョーカーが発動し、大量の血しぶきがシンジの目の前を覆う。

呆然とするシンジ。それからシンジはうずくまり、殻に閉じこもった様に身動きしなくなってしまう。

【考察】

二本の槍を抜いたのちに、世界が崩壊していく様を目の当たりにし、シンジは自分が、万能空想なかで起こしてしまったこと、これまで述べてきた様に妄想分裂ポジションの中にとどまり、槍を引き抜いてしまったが、そこでようやく自分の犯した過ちに気がつき、その現実を直面し苦悩していく様を描いている様に感じられる。そして、自身がまた過ちを犯してしまったことに気づき、カヲルというそのとき無二の親友をも喪失し、強い喪失の念に駆られる。

それはメラニー・クラインがいう妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行の様を描いている。妄想分裂ポジションから抑うつポジションに心性がしようとしているが、なかなか行けず、苦悩し、踏みとどまる心性を鮮やかに描き出している様に感じられる。

クラインの考える乳児の心性を改めて伝えと、生まれたばかりの乳児は栄養を与えてくれる乳房と一体となっている幻想を抱き（それを良い乳房ととらえる）、それ以外のものを悪いものと捉

え、良いものと悪いものを分割して捉え、乳房がない時に無いとは受け入れられず、悪い乳房がやってくるかと捉える。それが妄想分裂ポジションの心性だが、母（養育者）に抱えられる中で、徐々に現実を受け入れるようになり、良い乳房も悪い乳房も同一であるという事実と直面し、自身は良い乳房と一体ではないということに喪失感を、そして悪い乳房と捉え、自身が容赦ない攻撃をし続けてきたことに強い罪悪感を強く感じる（抑うつ不安）といわれる。（クラインは、「愛する対象の喪失は、離乳期に最高潮に達する」と述べている。）そこから妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行が行われていくことになるが、その中で生じる、無価値感、絶望感や悲嘆の念が強くなり、自身の心の中に受け止めきれないと再び妄想分裂ポジションへと退行してしまう。

この視点で、エヴァのこのシーンについて考察してきたいが、これまでのシンジはその喪失を受け止めきれず、退行する中で万能空想に浸っていったが、カヲル（ある種良い対象）に色々な思いを受け止めていく中で、再びインパクトのトリガーをひいてしまったものの、一方で自身の万能感を放棄し、自身の犯した過ちに気づく。一方でその自分の犯してしまった過ちや喪失（カヲルは良い対象ではなく使徒だったこと）を受け止めきれず、再び退行していくこともできず、妄想分裂ポジション、抑うつポジションどちらの心性にもいくことができず、身動きが取れず、側からみてなにかもぬけの殻のような状態になってしまった様に見える。

マリ「ついでに……ちょっとは世間を知りニャ！」

アスカ「まだ甘えてる！いつまでたっても手間のかかるガキね！」

と言いたくなる気持ちもわかるが、この状態のシンジには生活感のある温かみのある関わりが必要

不可欠な様に感じられる。

シンジはその喪失を受け入れられないで、生きる気力を失い、もぬけの殻のようにになっているが、シンジの心は悲嘆や絶望、無力感の中でのたうち回り苦悩しているように感じられる。次の新劇場版はその苦悩の中で起きる抑うつポジションへの移行と彼の再生と心の成熟を描いていく様に感じられる。